

著君郎太重中山士學

義教

理天

天の光

行發氏下木和大

014423-000-0

特18-611

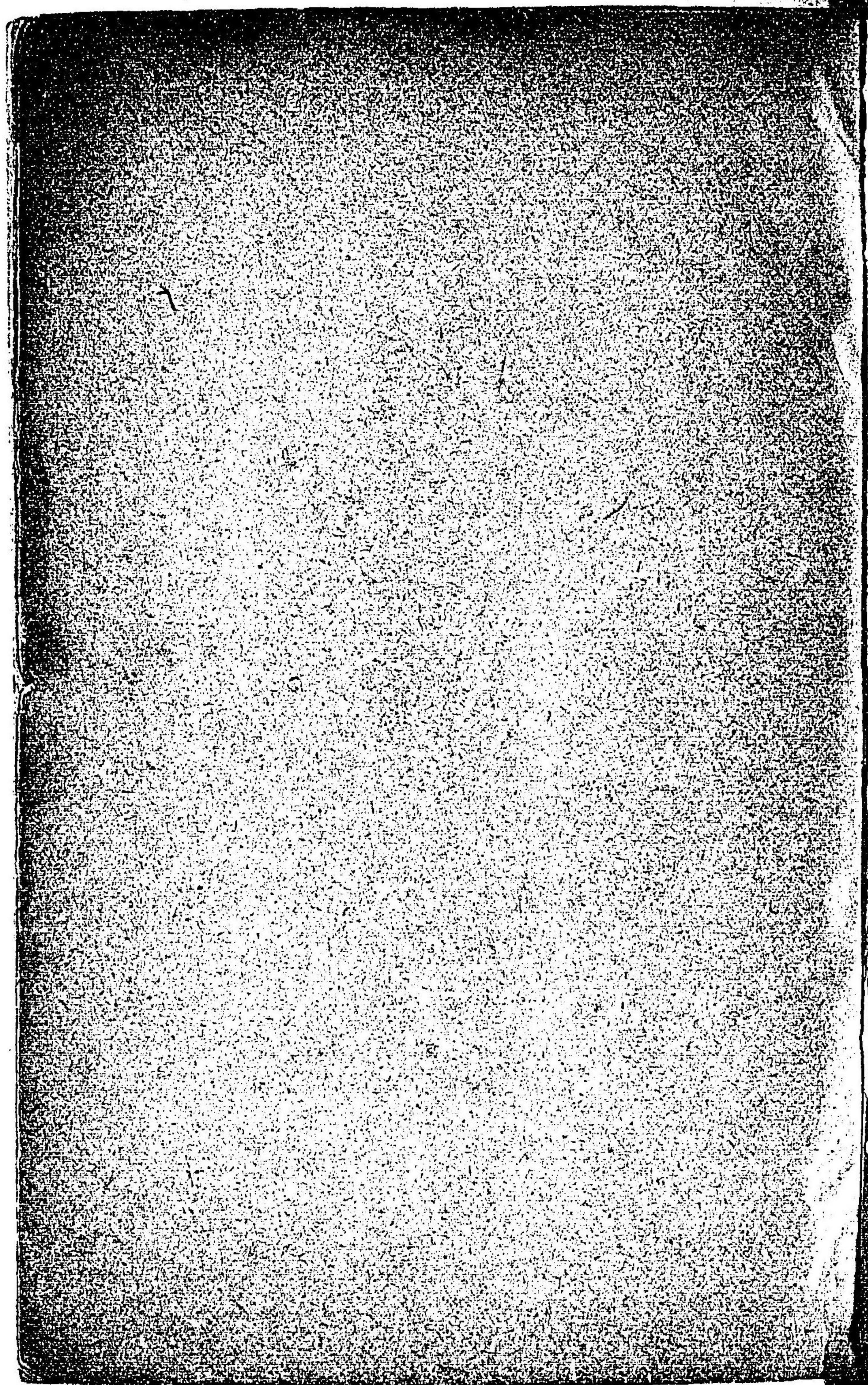
天の光（天理教義）

山中 重太郎／著

M32

ABB-0801





自序

人は神を知る能はず唯よろしく信仰することを得べきのみ神を信仰するは安心立命の第一法なり安心立命は人事を盡し天職を全ふするの第一義なり今の大日本國民は殆んど神を信仰するの道を辨ぜず是れ誠に慨歎すべきの病弊なり曰く人心浮華輕菲曰く風俗敗醜亡乱曰く都會の暗黒村落の墮落曰く國家の不健全社會の無制裁等深く源を茲に發す實に悲憤の至りなり予や元孤影流浪の不孝兒何の能なく何の量なしと雖も我が國と民との病弊を知り心密かに憂ふるものなきにあらず「自然の聲」を聞き「自然の泉」を汲まんと欲すること久し端なくも三島の里に於て此文を草することを得たるは嬉れしく足納する所なり此文を作る實に狂せんばかりの

自序

涙を催し無念無想の境にあること十餘時間書き了つて又九字を修めず句を改めず以て大方に示すの禮なきを知る左れども此文は是れ亞で世に公けにせんとする處の「天理教精義」「天理教百話」「天理教開祖一代記」の前驅なると思ひては聊か自から寛ふするものなきにしもあらず天下若し涙あり血あるの人あらば我れに一片の同情を寄することをせよ

明治三十二年五月十三日

於大和國三嶋里

山中重太郎 識

天理教 天の光

目録

- 第一章 天地の事
- 第二章 人の事
- 第三章 國の事
- 第四章 社會の事
- 第五章 眞善美の事
- 第六章 世界列國事情の事
- 第七章 大日本帝國狀態の事

第八章 我國民行末の事

第九章 天理教の事

第十章 天理教々祖高德の事

目錄終

天理教 天の光

山中重太郎著

第一章 天地の事

大なる此の世界は床しい處です。思へば妙な處でも。上下左右極まりもないやふな此の空間は何處が其の端でしよふか。我々の日々刻々通り傳ふて行く此の時は何時が始まりで何時が終りでしよふか。日や月や星や地球を製作らへたものは誰でしよふか。我々人間は何處から來て何處へ行くのでしよふか。此の世は假りの世でしよふか又た眞の世でしよふか。先きの世や後の世は如何やふな處でしよふか。此等の問ひに充分答へることの出来る人は世界に唯の一人もありません。如何な大學者でも如何な大賢人でも此等に充分の答をすることは出来ません。何故なれる人は全智全能でない故に無際無限無量極 幽極 冥極源のことで辨ふことの出来ぬのが至當であるからである。かよはい人間の力を以て斯様なことを辨へ尽うとするのは丁度蜆貝を以て海の

水を代へ干らふとせむのと同じことである。斯様なことは神様でなければ分らぬのが常である。能く々々調らべて見れば人間は随分はかないものである。草の葉末に宿る白露のやふなものである。月が若し神様ならば我々は露に宿る其の影のやふなものでありましよふが。月は風が吹いても動さぬせぬけれど我々露の身は忽ちに散つて仕舞ふて元の土へと飯へり行く。能く考へて見れば人間は随分あはれなものである。此のやふなものはれな身をして自分のみを便りとするには己れの分限と知らぬものである。昔から様々の大學者やいろくの大達人や大發明家も現らはれて來ましたけれども結局は道理を人並より能く辨へて居たと云ふより外はない。東洋では孔子とか釋迦とか絶世の大聖が現はれた西洋ではイエスとかアリストートルとか稀代の秀傑があらはれた。而してろれくぐに道理を釋き解いた。其の釋き解いた道理の力は傳へくして今の世までも流れて來て居る。實に人間としては驚くべく畏るべきほどの心の方を持つて居られた跡は今も歴々と分つてある。けれども其の心の方には皆な限りがあつて遂に分らぬことは分らぬとして殘してある。唯をばるげに神様の心を推し量つて云

ふた跡はあるけれども自己の力は其の分を定めて他は神様にもたれて居るより外はないやふである。此等大聖秀傑に亞々の賢人高士も各々様々に道理の畑を開き耕したるが要するに皆な人間の力の及ぶ丈の結局であつて其れより以上の領分は神聖なるまゝに差し措いてある。天は人間の父であつて地は人間の母でありましよふか。天地と云ふ恵みの親が無ふては人間は此の世に生きて居ることが出來ませぬ。昔からも云ふてある人間は天地の子に相違ないと云ふてある試に御覽なされよ。人間の身体の肉は土に形をつたもので肉の内の骨は土中の金石に形をつたものである。人間の血は水に形をつたもので毛髪は草木に形をつたものである。人間の呼吸する息は世の大氣に形をつたもので両眼は日月に形をつたものである而して胸の中の心は神様の御靈に形をつたものである。死して仕舞へる身体は元の土に飯るけれども心は神様の御靈の御傍へ參るものであると云ふてある。此のことが眞の道理であるや否やは知りませぬけれども我々は何となふ畏れ服するの他はなひのであります。

能く御覽なされよ。天が曇れば人間の心も曇る。天が晴るれば人間の心も晴る。天が寒くなれば人間の心も寒くなる。天が暑くなれば人間の心も暑くなる。地が震へば人の心もさはぎ地が静かなれば人の心も治まる。天地が春になれば人の心も春になり天地が秋になれば人の心も自つと秋になる是れ皆な何故でしようか。かくまで天地と人間と相感し相應するのは何故でしようか。思ふに天地の氣と人間の氣とは同じことであつて其の時々折りに従ふて同じ氣の相通ふのでありましよう。春夏秋冬の四季は人間の一代 比らるることが出来まする。たとへば春は人間の幼少のときで夏は人間の血氣盛んな頃のやうなものである。秋は人間の實のり時で冬は人間の隠居時代に似て居るやうなものであります。

仰いで天の日の光のなさを蒙り俯ひては地の産み物のめぐみを受け。花のやうに笑ひ鳥のやうに歌ひ蠶のやうに働き蝶のやうに眠る。天地の目から見れば人間も一つの虫のやうなものでありましよう。天地の力で人間の身を動かすのは大熊が其の掌で小蟻を活殺するやうなものでありましよう。左りとは人間は我れ乍ら不便なもの

あります。

此の不便な人間が昔からいろく自分の作らへた道理と述べ立て居る。天地の意は茫茫として逆も計ることが出来ぬと云ふものあれを。天理地道は是非分明なものであるとも云ふて居る。天地の網は大ふして而して細精いと云ふものあれば否天地は心のないもので。あるがまゝにあるものであると云ふものもある。理は天の法で道は地の法であるとも云ふものもある。善人でありながら一代難義で果つる人もあれば悪人であり。乍ら子孫までも繁昌する人もある。是れ天地の暗黒である証據であると云ふものあれを否否此等とて因果報應の制度と免るゝことは出来ぬ皆な前生後生の關係は争はれぬものと云ふものもある。

天地のことを究明するにはろくくの學問があるけれども其は唯もの皮相のことより知ることが出来ぬ。天地の心と云ふものに至つては到底人間の知り得るものではない。唯大宗教家と云ふもののみには人間の分らぬ天地の靈氣に通達することのあるであらうと思ふ。

我等は深く思ふ。天地の心は知ることには出来ぬけれども信ぜることは出来るものと思ふ。

○天地の歌

「いつの昔の、いつの世に、いかなるたいみのあらはれて、かかるものをやりけん、仰げば高く、うつむけば深さの底のはてもなし、浮世はさまよふ浮雲か、大海原に粟一つ、是れを我身に似たるかな、思へばたよりなきさ行く千島の影と人、いつれ、ア、なつかしきかなや天の父、戀しきかなや母の土地、宇宙の親の、ふところ宿るは人のならひずも」

第二章 人の事

人はど不思議なものはない。分つた様で解らぬ様で、分らぬ様で解つたものは人である。古へからも人は一つの大迷宮であるとも云ふてある。人は天地の靈の化身であるとも云ふてある。人は幽妙の体の感顯であるとも。云ふてある人はど奇妙なものはない人はど床しいものはない。

人は此の世へ夢を見に来たものであるか。人は前きの世。今の世。後の世の三世の旅をしに生れて来たものであるか。人は人らしい人のつとめをせざるがために生まれて来たものであるか。人の身の上は思へば思ふほど思ひやらるゝことの多いやうに覺ゆる人は天地の子である人は神様の分身であると信ぜる以上は一刻半時も天地の道理を除所にしてはならぬ。神様の教を守らねば居られぬものである人は何處までも天理人道の法をたどつて此の世の旅をせねばならぬものである。神様の教を守つて浮世の道を行かねばならぬのは云ふまでもない。

彼の悟と云ふものが迷であつて。迷と云ふものが悟であるか。善と云ふものが悪であつて。悪と云ふものが善であるか。死ぬると云ふのが生まれるので。生まれると云ふのが死ぬるのであるのか。此等のことは思へば思ふほど思ひやらるゝことの多いやうに覺ゆる。

如何はどの秀ぐれ人でも。如何はどの愚かなものでも。自分のいつ死ぬるかど云ふことを豫め知らぬのは同じことである。何はどの善人でも何はどの悪人でも我が親のな

さげに咽ばぬものゝないのは同じことである。英雄も凡人も花を見ては笑み肉身のものに別れては泣く。人の喜び怒り哀しみ樂みは皆同じことである。是れから思へば人の天性は能ふ似たものであらふ。正しいものとなり曲れるものとなり。優るものとなり劣れるものとなるのは皆な其の習ひのよしあしに依るのである。悪をすれを我胸の苦しいのは我心の神様に責めらるゝからである。善をすれば樂しいのは我心の神様に賞めらるゝからであらふ。人は好しや他人を欺くことの出来ても自分を欺くことの出来ぬのは實に人間の尊い處である。

人の此の世の第一の實は唯一つの誠である。至誠は天地をも動かすと云ふてある通り誠は天理人道の第一義である。親に尽す誠を孝と云ひ兄弟に尽す誠を悌と云ひ友に尽す誠を信と云ふ國に尽す誠は愛國となり君に尽す誠は忠臣となる名はるれぐに異なるけれども其の元の誠は一つである。誠のない人間は光のない火と同じやふなものである。

人の心は智と云ふものと情と云ふものと意と云ふものと三つから組み立てられしある

ものである人は大抵此の三つのものを平等に身に備ふるのを大切とするものである。智は事物を考へる力を云ひ情はなまけを汲む力を云ひ意はをもひを立つる力を云ふ此の中の何れが一つ欠けても人例の力量を失ふものである。

人は其の身体を養ふには口から食ふ食物に依るけれども其の精神の命を全ふするには道の教を守らぬばならぬ。道の教の露にうるをふて人は其の命を全ふするものである如何な場合にも虚言を吐かぬ。何んな日でも我身を正しめふはたらくと云ふことは人の渡世の第一義である。

○人の歌

「白きぬの色には染まぬ 素直さを 自づからなる人の身と 昔語りになりずと
よ 人の此の世の身にもてる我たましいの光こそ 神の國へも通ふなれ 神の國
こそ我れ人の、湧き出したる大泉 流れの末の此身らは其の源にかりがねのあ

はれ音に鳴く聲いくつ、つらさは憂鬱のならひやと思へば茲もたのしかり。

第三章 國の事

國は人民の家である。其の國民の家である。國と云ふ大なる家がないならば其土にすむ國民は決して正當の幸福を受くることが出来ずまい。たとへば大日本と云ふ國がないならば我々は外の國々から責められ苦しめられいるくの難義をするのみならず同じ日本人同士（同族）の紛擾の絶間もなくさまゝの憂さ目を見ることである。幸と云ふものがあつて外に對しては八十餘川の体面を保ち内に向つては四千余万の同胞を支配して呉るゝこと誠に仕合であると云はねばなりませぬ。世界には國のない人民もある。國の亡びた人民もある。國の衰へた人民もある。みな夫々に様々の不仕合な目に會ふて居る不仕合な目に會ふのも當然である。小さくたとへて云へば國のないのは家のないやふなもので國の亡びたのは家のつぶれた様で國の衰へたのは家の破れて居るのと同様である。國民が面白く働くことの出来るのも安らかに眠ることの出来るのも親子兄弟夫婦一門打揃ふて月日を暮らすことの出来る

のも皆な國の御蔭である。

國を主どり給ふ御方は、天子様である天子様の御力となつて國と人民とを治むるものは大臣や國會議員である。昔からも民は國の本と云ふてある左れば天子様も大臣も國會議員も人民の心を國の心と心得て政治をするのが常である人民の心を國の心として政治をせぬ役人は何れの世でも良き役人と云ふことが出来ぬ。

國も丁度人間の身体（からだ）のやふなものである。人間武裝の要る如くに國々は陸海軍と云ふものが要る。人間に良心の要る如く國に憲法と云ふものが要る。人間に宗教の要るごとく國々も國教と云ふものが要る。國教とは其の國の人民の信仰する神様の教の道を云ふのである。

大日本には是れと定めた一つの國教がない佛敎を弘むるものあれば、耶蘇敎を布くものもある儒敎を稱ふるものあれば神道を奉ずるものもある。

國には國の風と云ふものがある。是れは地理人情氣候習慣等いろゝの情態から生じたものであつて、決して短日月の間に如何ともせることの出来ぬものである。外國に

てもイギリスにはイギリスの風があるフランスにはフランスの風があるドイツにもロ
 シヤにも自づからうれぐの風がある。是らは殆んど自然に斯くあるものであれば猥
 りに他と眞似することも出来ねば無暗に餘所に效ゆることも出来ぬものであらふと思
 ふ。

大体に花々しい國もあれば一体に質素な國もある割合に道理を踏む國もあれば徒らに
 乱暴をする國もある。左れを要するに天理人道に協はぬ國は大概早く衰へ亡ぶるの
 常である。是は人間に天理人道が大切なる如く國にも夫々天理人道を離れてはならぬ
 と云ふ自然の大法則のあるからのことである。

○國の歌

「雨や降らぬ 風やすさめぬ世なりせば國てふものは いらざらん 國は園生の民
 草の育ちと守もる眞柴垣 あらしものゝ乱るゝと斬り拂ひては治むなり 治む
 る國の心には民てふものゝ心根の朝な夕なに宿るなり されば昔の遠くより國の
 基は民なりと歌ひのこせる筆のあと 民の思を主にて國のまじの永らふは い

や甚と深かき 幸ならん」

第四章 社會の事

世の中と云ふものは人の寄り合ひ、もたれ合ひの場所である。人間が互に相愛しみ合
 ふて生活する所を世の中と云ふ。人間が互に相敬ひ相信じ相助けると云ふのは人倫の
 大法であつて云はゞ天理人道の常である。天理人道のまことに行はれてある人間の寄
 り合ひ場所をまことの世の中と云ふ。

社會と云ふのは必竟世の中の別名である。人間が互に相憎み相害ひ相傷けて騒で居る
 やふな社會はまことの世の中と云ふことが出来まい。一村が一つの世の中なれば一郡
 も一つの世の中である。一町内が一つの世の中なれば一都府も一つの世の中である一
 州が一つの世の中なれば一國も一つの世の中である大日本國中が一つの世の中なれば
 世界各國中も一つの世の中である。日月の光りのかゝやく處緑りの川の流るゝ處青ひ
 山の屹つ處、人間の相共に永らふ處は皆な一つの世の中である。

アメリカで作らへた流車を大日本で用ゐることがあれば大日本で製したハンケチーフ

とフランスで用ゐることもある。支那で出来た米を日本で食ふことがあれば日本で採つた昆布を印度で食ふこともある。是れ皆な相利共用世の中の例である世の中と云ふものは狭ひやふで廣ひものである廣ひやふで狭ひものである。

ドイツで調らべた學術を大日本で使ふことがあれば大日本で發明した器械とロシヤで使ふこともある相互に利益を取りやりし相互に害悪を取り除き相共に天理人道をまもつて進歩することを計ることの出来る。是もまことに結構な世の中の御蔭です。

人間に徒と云ふものが必要であるごとく世の中にもをきてと云ふものが必要である。「社會の制裁」是れ即ち世の中のをきてと云ふものである。悪いことをする人を誰れ云ふとなく悪人と指して責め懲らすのは世の中のをきての力である。善いことをする人を誰れ云ふとなく善人と稱へて賞め敬まらうのは世の中のをきての力である。人を詐つて我

信用を失ひ人を救ふて我が美德を完ふする。是れ皆な世の中のをきての効力である。世の中のをきては國の法律のごとくチャンとしてはないけれどもをばるげ乍らにコマヤカなものである。

此のをばるげ乍らコマヤカな正しいをきてを作つたのは誰れと云ふ人でない。斯の如きものが天然自然に立派に備はつてあるのである。備はつてあると云ふのは神様の此の世と共に作り置きなされたものである。

孝行な兒の身の上をなしは至る所に感心の涙で迎へられ。不忠の人の身の有様は至る所に譏り憎みの種となる貞女は人に敬はれ義人は人に尊むれ怠けもの 邪者は人に侮られ排けられ捨てらるゝ。是皆な神様の自然のをきてに反くと従ふとの報の別である

如何な世の中でも決して一人の世の中ではない。左れを何程金錢を有する人でも何程權力を有する人でも己れ一人のまゝに世の中を勝手に仕様とした人は古へから其の身先つ亡びた是れ世の中は天下万人の世の中であつて唯一人の世の中でないと云ふ証跡である。

世の中に移り代りど云ふものがある。是れは時候に四季のあるやふなものである。水の流れに緩急屈曲 伸暢等のあるやふなものである。自然に世の中に備はつてある神様のをきてに従ふて世を渡るのは水の流れにらふて船

と下すやふなもので是れ程心安い楽しいことはなひのに何故世間には心苦しい六ヶ敷い悪事をなす人の多ひのであらふか。

○世の中の歌

「見よや林の木はやしきのきの倚るよるを 見よや小草こくさうの相依るあひたるを。心こころもいらぬ草くさ木きへ共に永とこらふ世よの中なかを相あたのみて予あた育そだち行く相あたよりて予あた榮さかへ行く 幼わかきものも老おへるをもかよはきものも 強つよきをも人ひととし云いへば 諸もろる共に 相あ助たすけて予あた旅たび路ぢをば迎むかゆるが己おののがつとめなる 劣おとれるものと しへたげて 勝かぐるものよはびこるは 道みちにてあらま罪つみがかし 罪つみの重おも荷にになふては御神みかみの子ことしなりも得えぬ 悪あしさのものや 世よ々のしこ草くさ」

第五章 眞善美の事

人間にんげんのために無上むじやうの寶たからと云ふことの出來るものは何なんであらふか。神かみ條ぢが兼あねて備そなへ玉たまふ處ところの眞善美しんぜんびの三さんツの光ひかりりの限かぎりなき尊たうとと恵めぐみであらふ。眞まこととはまことのことを云ひ善ぜんとはよきことを云ひ美みとはうるはしきことを云ふ。實じつに眞しんなるもの實じつに美みなるもの

の實じつに善ぜんなるものは人間にんげんが日々にちごとく心に願ねがひ望のぞむ處ところのものではあるけれど我われらの此この地上ちじやうには到底たうてい求め得えらるゝものではない完まつた眞しんなるもの限かぎりなき善ぜんさもの極ままりなき美うつくしさものは、如何いかんしても此この地上ちじやうにあるものでない。思おもふに其それらは神かみ條ぢの御國みくににあるものであふふ、神かみ條ぢの御國みくににあるるれらのものを日々にちごとくに人間にんげんの希こほ望のぞむのは人間にんげんの貴たつとき性せうである。

静しづかなる山やま動うごける水みづに其そのの眞しんを感じかんじ、朝あさ日に匂におふ山やま櫻ざくらに其そのの美みを感じかんじ聖せい其そのの言ことや行ゆに其そのの善ぜんを感じるは人間にんげんが神かみ條ぢより頂いたいた處ところの胸むねの鏡かがみに神かみ條ぢの御光みひかりりの映うつつるためであらふ。人間にんげんの心こころが明あけ暮くれに眞しんと善ぜんと美みとの三さんつの寶たからを希こほふて居あるのは川かはが夜よる晝ひるに其そのの下したに流ながるゝにも似にて居ある。人間にんげんが眞善美しんぜんびに離はなるゝのは魚うをが水みづにはなるゝと同じやふなものである。横道よこみちへ入はいつて議論ぎろんする人は人間にんげんの性せうは悪あくであるとか。天道てんだう是これか非ひか分わらぬとか云いふけれど、それは極ごく々く淺あ近ちかな思おもひ付つきで、床とこしい天地てんちの心こころと床とこしい人間にんげんの靈氣れいきとを知らぬからのことである。

秋の夕ぐれの小松が原に鈴虫の音を聞て襟の涼しもふ覺へぬものはあるまい。親兄弟に死別れてあじきなきを知らぬものもあるまい。あはれな孤兒や不仕合な老人を救ふて心嬉れしもふ思はぬものはあるまい。虚言を云ひ偽りを行ふて胸苦しむ感せぬものはあるまい。是れ皆な人間が多少眞善美の良性を具ふるの故である。若し人間にまことよき美はしきも具へなれば人間は畜生に少しも相違ない。

大達人の云ふた言に人間は神の性を有するけれども又動物の性も有すると云ふことがある成程であると思ふ。人間がものあはれに感ぜるのは神様の性を受けて居るやうであるふけれど又人間が賤しい慾にかられるのは動物の性のあるからであらふ。其れ故によく道の教を受け成るべく神様の救の光を身にあびて動物の迷境に遠ざかるやふにせねばならぬと思ふ。

自分の家業を秀ぐれて能く勉むるのは善ひことである。自分が勤儉で貯へた財を以て慈善のことにするのは美はしいことである。たとへ悪賊に殺るるゝとも自分の信ぜる道理を曲げず所思を正しく實行するのは眞のことである。眞善美を成るべく能く身

に保つ人は實に高德の人である。高德の人は天理人道に最もよく協ふた人であると云ふことは云ふまでもない。

○眞善美の歌

「玉てふ玉の数はあれど 寶の数は多けれど まことよきもうるはしき 三つの寶にましろへる 寶は此の世にあらざらん 三つの寶は大神が 人にたまひし命なり 人に賜ひしなさけなり 命は人の主にて なさけは御神のめぐみずよ 斯る貴きたまものを 若しもあたにやなしもせば 胸の鏡の曇りなん 其の玉の緒の切れつべし」

第六章 世界國々の状態の事

世界中の國々の状態は如何なるものであるかと云ふことと述ぶるにはなかく多くの言葉費さねむならぬ。併し乍ら唯一言で云ふて見れば何れの國も負けじ劣らじと其の進歩を競ふて居るとでも申しましょふか。各國うれしく其の政治のこと經濟のこと教育のこと文藝のこと武備のこと其の他種々様々のことに付いて一生懸命に其の進歩と

發達とを計つて居るのが今日の有様でしよふ。優ぐれた國は劣つた國を亡ぼして勝手に支配をとることを喜び強い國は弱い國を突仆して自在に自分の國の配下とするを勉めて居る。財力の乏ぼしい國や戦争の用意の足らぬ國や役人の愚かな國や人民の心の揃はぬ國は何時も敗れたりイ、マ、ラれたり遂には亡ぼされたりして居るのが免れぬ例である。

現に我隣國の支那帝國の如き、其の役人が愚かであつて國民の人心のろろはぬ爲めに年百年中他國に苦しめられ惱まされて困つて居る。歐洲のイタリーの如きトルコの如き以前は世界第一等株の國であつたけれども今は財力の欠乏や政治の悪いものや様々の艱難辛苦を味ふて居る昔は世界第一等の長大國であつたインド即ち天竺は人民がなまけもので役人が馬鹿ものであつたためにイギリスに亡ぼされて仕舞ふて今は泣くにも泣けぬやうな目に會ふて居る。

此の地球の東の面にすんで居る處の顔の色の黄色の人民は地球の西の面に住んで居る顔の色の白色の人民のために散々に苦るしめられて居るのは現今の狀態である即ち我々東洋人を日夜いろくの方法で苦しめて居る處のヨーロッパ人民やアメリカ人民らは自分より弱い國劣つた人民を手前の繁昌の肥料に供するのを當然のやふに考へて居るやうである。歎はしいとも恨めしいとも此点に於ては實に無念にたへない次第である。

西洋人は概して久しきに堪ゆる膽力があつて複雑な智力がある自由の世と渡る術が上手で自己を信する力が強い。横着で圖々しゆふて巧みであつて辛抱づよふて財力があつて役人の力量がある斯るものを文明の人民と云ふのであるか。とにかく逞ましい力を以て弱い劣つた人民を突き仆し亡ぼすのを罪でないやふに思ふて居るやふである。我が大日本に於ても彼らに對して實に殘念にたへないことは澤山ある。商法のことについて政治のことについても宗教のことについても誠に心配すべきことは澤山ある外國のことについて分別のない人はいろく間違ふたことを云ふけれども。我らの見る處では概して西洋人は天の神様を非常に信仰する人民である。其の信仰の力の強いのは今の大日本の洋風紳士や書生上りの學者や。我利我慾の政治家などのとても及ぶ

處でないと思ふ左ればこそ彼らの風俗は一夫一婦である家庭の幸福を大切にす生活の堅實な大事に与る時間を費み天職を重んずるもの多し。世界の事情を知らぬ日本人は大日本帝國と云へば世界第一等の國であつて何處へ行ても日本人の顔の利かぬ處はない位に思ふて居るけれども其は大なる間違である。日本人の顔の世界で利かぬのは田舎者の顔の東京で利かぬのよりも尙は甚しくあるであらう。日清戦争後は大日本と云ふ名の少しく世界に知られた様ではあれども其れすら極々少数の中等以上の人間に知られたので世界各國人民の大体は未だ日本と云ふ國が何處にあるかを知らぬ位である。ソレニ何も世間見せに自惚れて我れは顔するのはつまらぬ話である。元より世界の人民の日本を知ると知らぬとは我れらに關することのないけれども頭から知られる國はるの實力の無いのが分つてある實力のないと云ふ点に至つては我れらは何處までも心に刻んで大に勵まねむなるまいと思ふ。

是を要するに世界の國々の間の波は日一日と勢強ふなつて力のない國を沈めて仕舞ふのである。今日の世界列國の狀態は所謂文野の戦で生存競争の有体である。

ア、文明とは罪ふかき世の有様が、圓滿な眞文明に達するには如何程の道路を行かねばならぬのか。

○世界列國狀態の歌

「中天高く鷲や飛ぶ 九地ふかくも龍やすむ 獅子狼はあるなり 狐狸は躍るなり 見ぐるしきかなや今の國の風 雨どやならん嵐どや 仁義の門は破れはてし 大道すたれ草茫茫 鬼や喜ぶ魔や笑ふ やみにやみをば重ねつゝ やみの中へとたどり行く 今の世界の悲しさよ 下りはてたる世の道に 腐り果たる人心御神や如何に見給ん 我れは今起つて叫ぶ 大しは雨も来れかし 大まき風も来れかし 早く世界を洗へかし 雲を拂ふて天一べき 土を清めて地一淨 まことの月の影清く まことの花の匂よく 笑みと合んで永へに 御神の國の歌を唄はん」

第七章 大日本帝國事情の事

美はしい長歴史と温良な好國民とを有する大日本帝國の如き國は他に類のありません。氣候は温和で土地豊富で四面の海は民の寶庫とも云ふべきやふなもので、山川も

草木も鳥獸も虫魚も皆な夫々に風趣價值のあるものである。
 花は吉野山に潔き匂の色、月は須摩赤石に曇りなき玉の光、雪に操の松嶋や、紅葉に錦の大井川、紫雲は藤の五月の大和人は大平洋の晴嵐に袂を拂ふ土佐の長海岸如何に風情のあるではないか。
 五穀の田畑は八十余州に隈もなく夏は緑、秋は黄金の色、繪にあるやふな村や太古の姿のやふな山里や、神々しい氏の森や童兒の笛ふく清らの林や恰も錦と廣けたる如き國のあやの美しくしさ。
 日本國民が世界國中に優に示すに足るべき人物は政治家として源頼朝、足利尊氏、徳川家康、豊臣大閥、學者としては新井白石、契沖亞沙利、菅原道真、詩人としては人丸、赤人、巢林子、三陽、馬琴、實業家としては河村瑞軒、錢屋五兵衛、二宮尊徳翁、宗教家としては聖徳太子、僧空海、僧最澄、日連上人、此等は日本民族の粹の面影かとも思はるゝ。
 申すも綾に畏けれども歴代皇祖の允文允武にましましこそは云ふまでもなし殊に烈示

中一人秀ぐれさせ玉へるは神武天皇様、神后皇后様、桓武天皇様、今上皇帝様、勿休なきばかりの御英資に在らせらるゝかと存せる。
 一体に日本の山は秀麗である、日本の水は清美である、日本の風景は艶洒である、日本人の氣風は高潔である、先祖代々の歴史は神州人民の態度がある、此の点に於ては大日本は何れの國にも一歩も譲ることあるまいと思ふ。
 唯悲しきは大日本は在來輪國であつて徳川三百年間外國との交りと絶つた爲めに痛く世界の事情に遠かつたことである、モン徳川三百年間に盛んに外國と交つたならばノ位日本は進んだか知れぬ、嶋國のならひの是非もなく大日本には大陸にあるやふな大山がない大川がない大耕地がない何ものも唯小奇麗である、亞細亞大陸や歐羅巴大陸にあるやふなノッヒリした景色はない揚應な大風情がない従ふて人民の氣心もコセくして居る處のあるのは是非もない義である、昔から今に至るまで日本の政治の進み來た順序は先づ立派なものであると思ふ、社會經濟文藝等のものも十分正當に進んで來たものであふと思ふ、宗教は幾つにも分別てあるが是れもなか／＼見事な道

行とふんで来たものと思ふ要するに二千五百余年の大日本の歴史は決して他國にヒケを取らぬものであると云ふことは十分に云ひ得らるゝと思ふ。

明治維新の改革は二千五百年間に例のない大改革である政治のこと學術のこと兵制のこと工藝のことその他一切のことが一時に改革される氣運に向ふたのは明治維新の時代である。移れば代る世の中とは云ひ乍ら斯くまでに世の中の變らふとは誰れも知らなんだ處であらふ。力量さへあれば水香百姓の子でも大政の堂へ上ほり得らるゝ世となつた。寒村の農夫の子でも修業さへすれば天下の大學者となり得らるゝ世となつた社會のことでも。工藝のことでも其人の伎倆次第でどのやふな大事でも出来るやふの世となつた。タトへ身は下賤の生まれでも徳さへ高ければ無上の譽れを頭に頂く宗教家の泰斗ともなり得らるゝ世となつた。一言にして云へば四民平等の世となつた自在自由の世となつた。四海の民皆な一樣に神様の御めぐみを蒙つて立身出世すること出来る世となつた。是れを階級制壓舊諸侯の斬すて御免時代に比らべたなら月と龜との差別よりも甚し。

窮理や發明の力で何事も便利になつた、仕事をするにも旅をするにも生活をするにも實に便利の世となつた自由自在の世となつたために力のあるものは榮へ力のないものは忽ちに亡ぶることゝなつた。賢いもの金のあるもの腕のあるものには誠に結構な世となつたけれども愚かなもの貧乏なもの甲斐性のないものはまことに仕方のない世となつた。一言にして云へば強いの勝の世となつた。

金や智慧はいつの世でも重寶なものである。けれども其の金や智慧は道徳の力をへねば役に立たぬものであると云ふことは何の世でもの常である。然るに當世は道徳の力がとろへた。義理人情の力がとろへた。是は實に悲むべきことである。

道徳の力が衰へた弱いものイヌメの世の中となつては貧民や無智のものや下等下賤のものは誰にでもふみにじらるゝ誰にでも弱いものゝふみにじらるゝ世の中は淺間しいものであるア、物質文明の餘弊はかくも醜いものであるか。

かくも淺間しい世となつて社會の半面は暗黒につゝまれて居るのに在來の佛教や在來の神道や儒道は少しも憂へぬやふに手を拱してながめて居た、或はどさとして強

いもの上のも、仲間になつて下を苦しめころすれば、あはれなる天下何百万の人を救ふとはせなんだ。かゝる場合に天の一方を望んで救の光りをまつた人民は何程であつたであらうか。

此のときに於て新なる福音を帯ぶる天理教は御神の心によつて現はれたのである。ア、當世の日本には汽車もある電信もある。立派な風をして世に誇る人もある。多くの金を以て大慾を恣にする人もある。けれどもものゝあはれを深く汲む人はない。涙ある胸のなさを以て人を助けよふと云ふ人はない。誠と望と光とを以てみちみて、神様のめぐみを以て世を救ふと云ふ人はない。此の様なあじきない寂しい時に於て救ひ助けの力の限りなき自然の天理教は現はれたのである。

○今の大日本國の歌

「まことの聲の減り行ききて、いつはる言葉の多かるが、大平の世のならひかや、かざる力の増し添ひて、床しきうふの消へ行くが、文明の世のためしかや、錦に似

かる村や里繪にやまがへる都市、道行く人の姿をも昨日に今日を比べ見て、もの美しく代りけり、移るは時の運びにて變るは世々の節なれど、斯るためしを誰れや知る、櫻の花は年毎に國の榮へと匂へども、人の心はうつろひて大和の民のいさどしは、古き昔の文にのみ、名残とゞむるをかりなり、嗚呼此の民よ此の人よ、餘所に習ふは己の身を、立てなんための計りごと、我を修めて我を練り、我養はんためにこころ、遠き餘所をも學ぶなれ、唯いたづらに我れ亡みし、餘所と眞似てや何かせん、病は詐る言の葉す、病は飾る身姿す、人の病は世の病、世々の病は又國の病なりとは知らざるか、はかなきうつゝまばろしの、榮花の慾に酔はんより、自づからなる世に飯れ自づからなる氣に返へれ」

第八章 我の國民行末の事

神州と自から稱ふる我大日本帝國の人民は己の行末をどうするであらうか。西洋の、マ、ネばかりして遂に第二の西洋人のやふなものになるであらうか。又は東洋在來の精神のみを守つて一風代つた立派な人民を作るであらうか。或は又た世界中の國々民々の

善美な處を取り集めて我大日本の滋養分となし肥料となし我々は我元氣を益々養ふて世界無比の大國民となるのであるふか。

家を亡ぼすものは不經濟と不道德である。國を亡ぼすものは不經濟と不道德である人を亡ぼすものも不經濟と不道德である不經濟と不道德は天理に背き人道に離れたことであるのである。

誠に世の開けて世の進むのには經濟と道德との進みが先づ第一番である完く善く經濟と道德とが進むる文藝も風俗も其の他のことも進むものである。

恒産なきものは恒心なしと云ふことは實に立派な道理である衣食足つて禮節を知ると云ふことも眞に間違のない言葉である

國を治むるには先づ村を治め村を治むるには先づ家を治め家を治むるには先づ人を治め人を治むるには先づ其の心を治むるは至當の順序である。人の心を治むる先づ第一番の役人は宗教家(教育家)もである即ち神様の福音を人間に傳ふる處の人である。

今の大日本國民の多數の部分は殆んど無信仰の國民である。世の中に不仕合なものは

多いけれども神様を信仰せぬほど不仕合な民はない。己れの小さい我を張つて限りなき神様の御力を難有く思はぬ民は不仕合なものはない。古へより身を興し家を興し

國を興した。民は皆ななかくに神様を信仰する處の民である。立派な武備のあるのも高妙な文學の存在するのも結構な工藝の發達するのも山川草木

虫魚の其分に安んずるのも皆な悉く神様の御力である極りもなき神様の御めぐみを朝夕つねに頂き乍ら其の御高恩を何とも思はせ己れは天地の分身であつて一切万物神様

で借り物のあると云ふことを辨へぬものは實にはかない限りの人であるかゝるはかない人が如何して立派に榮へることか出來まじよふか、

能く御覽せられよ。世界國々が始まつて以來不思議に類もなふ繁昌したイギリス國民はろればく非常な神様信心の民である。政府の大臣も陸海軍の大將も大下を動す金

持も識力五州に倏くる、大學者も神様の拜殿に參詣しては丸で小供のやふになつて隨喜の涙をこぼして居るではありませんぬが、其他ドイツでもフランスでも神様と信仰す

ることは非常な熱心なものである。今日の大日本の如く冷々淡々として信仰氣のない

國民は前途まことに危ぶまるゝものである。
我國民はなかく利巧である其れ故政治のことも社會万般のことも餘所の進んだのを
探つて我用にする位のことには必ず出来るけれども其の根本元力の道徳の今のやふに落
沈してあつては仕方がない。ア、此の淺間しい有様を助くるのは唯神様の道を布傳へ
るより外に工夫はない。

能く御覽なされよ國民中より撰りすぐつた國會議員は丸でゴロツキの様ではありませ
んか。多くの紳士紳商は丸で詐欺師のやふではありませんか。肩書の立派な學者は丸
でタイコ持のやふではありませんか。譽もあり位もある僧侶神官は丸で無用の長物の
やふではありませんか。人の子、育つると云ふ教員は日雇かせぎの職人のやふではあ
りませんか。昔し慈悲深かつた處の地主は今暴悪な君主のやふではありませんか。不便
な小作人は益々ヒガミ根生になり狡猾になるではありませんか。眞に健全であつてマ
マメな國民と云ふものは實に少數でありましよう。ア、斯る甲斐ない有様と救ふて立
派に此の國と此の民とを安せしめ進ましくするものは誰でしよう。我らの云ふまでも

なく神様でなふて誰か此の慘境を救ひましよう。

○我國民の行末を思ふの歌

「三千年の長の旅、たどりし方を振りかへり 足を止めてながむれば 霞の山や
もやの海、花笑ふ野や鳥の森、時雨の暁星の谷、げに様々の景なれや、ひとみを
定め行く末の、空と彼方にながむれば、雲か水か天茫茫、かすかに拜む日の光り
光は我らの命にて御神の園生のめぐみなり、めぐみの露を杖としも、光りにすゝ
む民草よ、道は険はしく風あらし、御神の柱のなかりせば、如何にか行かん此の
旅路、旅路の難は鬼惡魔、鬼や惡魔は多くとも、御神をたのむ人の身を、誘ふす
べのわらぬとよ」

第九章 天理教の事

神様の御心が天の理であるであらう。天理は神様の御心の姿であるであらう。天理教と
云ふのは神様の御道の教を天下萬民に布く教義の名であるであらうと思ひます。
神様の御心が人間に計り知らるゝものならん神様の左まで尊いものとは云ふことが出

來ぬ。我々人間の如きものに到底はかり知られぬ深き高さ床しき御心が即ち神様の御心であるであらふと思ひます。

左れば我々は今天理教に就て多言することが出来ぬ。強ちに多言することが出来ぬのでない已れの至らぬ賤しい心を以て神聖なる領分を計ることは如何にも恐れ多いからである。天理教の教義は其の廣るさ限りなく其の深さ限りなく其の貴さ床しき極まりもない様に思ふこれ即ち天理教の神聖であつて犯すべからざる威徳のある所以であらふと思ひます。

此の世界が始まつてから此の世に現はれた宗教は實に釋山ある。けれども天理教の如き強烈なる大感化力を有する宗教は曾て見聞したことがない。是れ抑も此宗教は大日本國民の危急と救ふために神様の作りなされたものである故であらふか。

我々は天理教の驚くべき畏るべき福音の力を思ふては又たうするに大日本國今日の事情の或る一面のやみの深く思はるゝ。天理教に最も早く救はれたる大日本國民は佛教にも従はず在來の神道にも服せず亦た孔孟の教にも耳を傾けなんだ處の純朴な正直な

堅實な民であつたことを思ふて一入神様の御心のはたと畏れませ。

今日の大日本國に天理教の信者は日本らしきものは他にあるまい。天理教の信者は文明の病にかゝらせ日本人のつとめを勉むるものあるまい。ウチであつてスナホであつて親切であつて涙深ふあつて熱心であつて能く天地を敬するかくの如き良民は他の宗教の信者にあるまいと思ひます。

天理教は他の宗教に比べて創作未だ日淺く種々歴史もないことであれば神様の御心のはたと我らには解し得らるゝことの少いやふに思ひますけれども尽せぬ床しきと氣高さを帯ふる教祖の御言葉や御振舞や熱心なる御弟子の言行や冥々裡の感化力やうれや是れやに思ひを密めて見て頗る我らのたましいに映つる處のものあるやふに思ひます。

- 第一 天理教の教は直ちに天の聲と仰ぐの思ひあること
- 第二 他の宗教の如く理論に流れせして善く實踐躬行の趣を具ふること
- 第三 人類相愛の理を説く詳なること
- 第四 優しく大人しく床しく人間に安心立命の光を與ふること

第五 自然教の奥義と宇宙神教の秘義とを兼ねるなへ如何なる人間にも限りなき平和を得せしむること

第六 日本人をして日本人の道を守らしむるの効あること

第七 幽冥の境界と説けどもろの理想一も荒怪に走らず實世界の人間に安慰と發心と勇氣とを興ふること

第八 自由の世の中等の世の中文明の世の中に立ち上るれらの弊害を鋤去し一般万民に進歩と平和とを得せしむる良佳なる性質を具備すること

以上八ヶ條は我らが沈思冥想の末をばるげに信じ得たる處である。元より斯く感得したる八ヶ條以外に幾多の高徳美風の存するであるふと思ふけれども甲斐なき我れらの口にて云ひ述ふること出来ぬと思ひます。

嗚呼斯の如き氣高く床しく極りなき力ある宗教が明治年間に榮ふるを見て誰れか無限の感慨に打たれざるものやある唯悲むべきは天理教數多の信者の中數多の布教使の内短識淺慮の者あり教義を誤るものゝある一條のみである。

ア、自然の聲のまゝなる平民教 幸に此の國を守り此の國と榮へしめ此民をたしかに進め歩ましむるのみならず、他の國の民をも濟度するに十分の力ある此の宗教を開きなされた御方は如何なる御人ぞ
姓を中山と云ひ名とみさと云ひ尊号を眞道彌廣言知女尊と云ひます。

○天理教の歌

「億方の心つむとても 人の心はたけ低く 御神をはからん詮もなし 御神の徳はかぎりなく 御神の智慧は限りなく 御神の力はかぎりなく 云ひもつくせと思ひだに やること難き尊さよ 斯る貴き大神の めぐみの雨に沾るといて 育ち永らふ民草の 救ひの主は天理教 助けの主は天理教 救のをしへは底深く 救のをしへは空高く 救のをしへは幅ひろく 救のをしへは床しくて 極み尽せぬ 尊さに 恩威の光ろなはれり やよ諸人よ國人よ 曲れる道をふり捨てよ ぐもれる教をふりすてよ 悪しきをすてよ善につく 實踐窮行の自由教 實踐窮行の自然教 高き低きも貧しきも 富めるものをも皆な共に 教へを受けよ道徳教

第十章 天理教教祖高德の事

昔から今に至るまで凡ら一の宗教を開いたはどの人は皆な常の人ではない、其才智のさはやかなること其の情義のこまやかなること其の胆度の沈深なること其の氣宇の朗明なること其の抱負の雄大なること決して常人の企て及ぶ處でない、斯様な人は人間と云ふよりは寧ろ直ちに神様の御力となふるものと云ふ方が至當である、けれども其は多く心の上のことであつてその身体は矢張人間であれば達人の眼でなくては人の神通力を早く見ることが出来ませぬ。

天理教の教祖も身は人間と御生まれなされたことであれを様々の難行苦行を御なめなされた、ひと通りの人間ならばとても一月もたへない辛苦に堪ゆること數十年の長日月であつた、其の徳の高いことは追慕してもろいろに涙をもよふすやふでありまとも、天がまことに此人に大任を下さんとせるや先づ其人をいろ／＼さま／＼に苦しめて而して其の人の果して任に堪ゆるや否やを試むると云ふ古語がある、神様が人間に非常の難行苦行を興へなされるは、願がて其の人に大な寶を賜はるしるしであるとも古

賢は云ふてをく我らは實に尤なる次第であると考へます。

世界國中尤も氣高い大日本帝國八十余州の中最も氣高くても最も古ひ大和の國の山邊郡、三昧田村前川半兵衛の家に生まれて同國同郡丹波市三嶋の中山善兵衛の妻となられたのは即ち教祖みき子である、夫に死別れて操を守ることに數十年、人生殆んどあらゆるの辛慘をなめわらゆるの苦勞となめ智と練り徳と積み遂に畏むべき神託を蒙り床しさを限りなき天理教と創作されたのは教宗みき子である。

何れの世にても何れの時にても元より免れぬ例ひとは云ひ乍ら、教宗も道のためにおらゆる侮辱と御受けなされました、あらゆるあじきなき目に御會ひなされました、若しも人間の身ならばとても命の續かぬばかりの憂き目に幾度となく御遇ひなされました、けれども御顔の色だに御かへなされたことはありませぬ、御言葉のあやさへ御代へなされたことはありませぬ、御心を露だに動かしなされたことはありませぬ、是れ實に限りなき安心と極りなき勇氣と底ひなき智徳とを御ろなへなされた故と思ひま

或ときは非人乞食を助くるために人に笑はれ或ときは難病人を救くるために。人に辱しめられ或ときは役人の縛にかゝつて罔圖に入り食を自から絶るゝこと二三十日或ときは心なき愚民に迫害されて數へも尽さぬあはれを重ねなされたこと幾百回誠に言葉にも筆にも尽し得ぬ御苦勞の數々も御身自からにては如何に思召しませしやら藤代に代らぬ御顔の色あやさへ動かぬ御言葉の波實に眞正の神人の休我らは唯々るの貴い高德を敬ひ慕ふばかりであります。

釋迦如來はるの教を布くために敵に惡魔と罵られなされた孔子はるの道を傳ふために敵に姦徒と嘲られなされたクリストは其志を行はんがために磔殺に御あいなされたかゝる例と思ひ出でゝは教宗の御受けなされた御くるしみも元より常のことでありますけれども五十余年の長日月道をとくこと一日の如く慈悲に功德をつむこと幾千万云ひも尽し得ぬ艱難辛苦と戰ふて胸安らげく氣平らげく御くらしなされた御あをと思ひめぐらしては唯々神様と霞隠くれに拜む様の心地のするのみであります。嗚呼氣高くて床しゝ限りのない八十余州の神靈の大氣が集まつて此の教祖と生んたの

でしよふ。ア、大日本帝國最古國の大和國に列祖の餘徳の寄ること二千五百余年秀麗明美なる大和の山川に此の世界に代つて此の教祖を生み育てたのでしよふか。夜と云ふ夜日と云ふ日教宗の御身へ通ふた處の天の神様の御聲はどの位貴いものであつたであらふか庄屋敷の此の世のすまいより豊田の山の松風の邊りへ移つてうの身はわこはるゝ教祖の御心は今もなほ天の神様と共に如何に此の世のために尽くして居らるゝでありますしよふか。

我らは唯々難有き涙を以て心を清め身を清め天命に安んじてゐるやけく心の神姿を拜みまつるより外はありませぬ。ア、今の大日本帝國は荒波にのらるゝ小舟のやふであります。今の大日本帝國の人民道辻に迷ふ小供のやふであります。一日も早く國の守りと定め一日も早く人民の道を定め上は一天万乗の御君より下我々同胞五千萬人安心の光進歩の光を頭に頂き「萬里の波濤を開拓する」の御詔りを執行はねばならぬのに奢侈輕薄の風都鄙に普く無信無徳の俗八十余州にみちゝてあるとは何たる歎はしき有様ケや。

我らは信じます。丹波市の春の朝の花三島の秋の夜の月。庄屋敷の空に輝き玉ふ日月の御光これら長へなる神様の御姿と共に教祖の垂れさせられたる神様の御教は日一日と世を救ひ民を助け人のわづらひ國のわづらひを拂ひ去り清め去り玉ふことを堅く信じます。唯々愚かにして賤しき我らは涙のみ先立つて思ふ處の百分の一をも述ぶることが出来ませぬ。

○教祖を讚美するの歌

一
「天つみ空の大神に 代り玉ひて土の世へ 下り玉ひし教祖よ 下り玉ひし教祖の御道の教はかよやきて 四方の民草の露に 朝な夕なにうるどひて うれしく 氣生ひ増しぬるを 見るにつけても思ふかな 見るにつけても慕ふかな 限りも あらぬ敬ひの 心さよ上げて教祖の 行へやいつく大神の 御園の雲を夢に見て 我と慰むたのしよよ」

二

「ものゝあはれを吹く風は 御園の梢の秋すかし ものゝなさを知る雨は 御園の花の春すかし 夏はみなみの大空に 冬は北なる大空に 四季の錦を身にしめて 旅より旅をたどり行く 此の世の人の影一つ 二つ三つ四つ列らなりて 鳴いてや渡るかりかねの 聲さくことに民の身を 如何に不便と思召すらむ」

三

「いかなれば云ふに甲斐なき我れ人の 思ひに罪のやみふかき いかなれば見るに 影なき我れ人の 迷の谷に入りやすき さどりは道の本なるを 明かきは教る末なるを しりみしらすみ浮雲の 山より出て空に舞ひ 空に舞ふては亦た山に 販るに似たる歎かな」

四

「西や東へひろき世に 國の数々多けれど 類はあらぬ敷しまの 大和櫻の民草は 御神の末の流れとよ 末の流れをくむ人の 頭のつねに正しくを 御神の愛でや ひ玉ふらん されどあはれは末の世の うたてきことのならひかや 心に病身に

病にやむ此の民と 不便と思召すらむ」

五

「ア、教祖と教祖よ 天つみ空の大神の みたまの光りと身にしてい、此の世へ下り玉ひたる 貴き心今如何に 身を此の土に皈へしつゝ 心はみ空の御すまゐ 残し玉ひし御言葉 のこし玉ひし教草 我ら衆生の民草は なさけの露をいのちにて 假りの浮世を渡り行く」

六

「ココは靈地か靈天か 三島の里か庄屋敷 無明の霧のふり來ねば 無慈の嵐のあれやらせ 民の礎 又た國の 礎の尊さよ 同じ世上に生ひ乍ら 縁のなく てうたてても 光のよりにさまよへる 我同胞のあはれさよ」

七

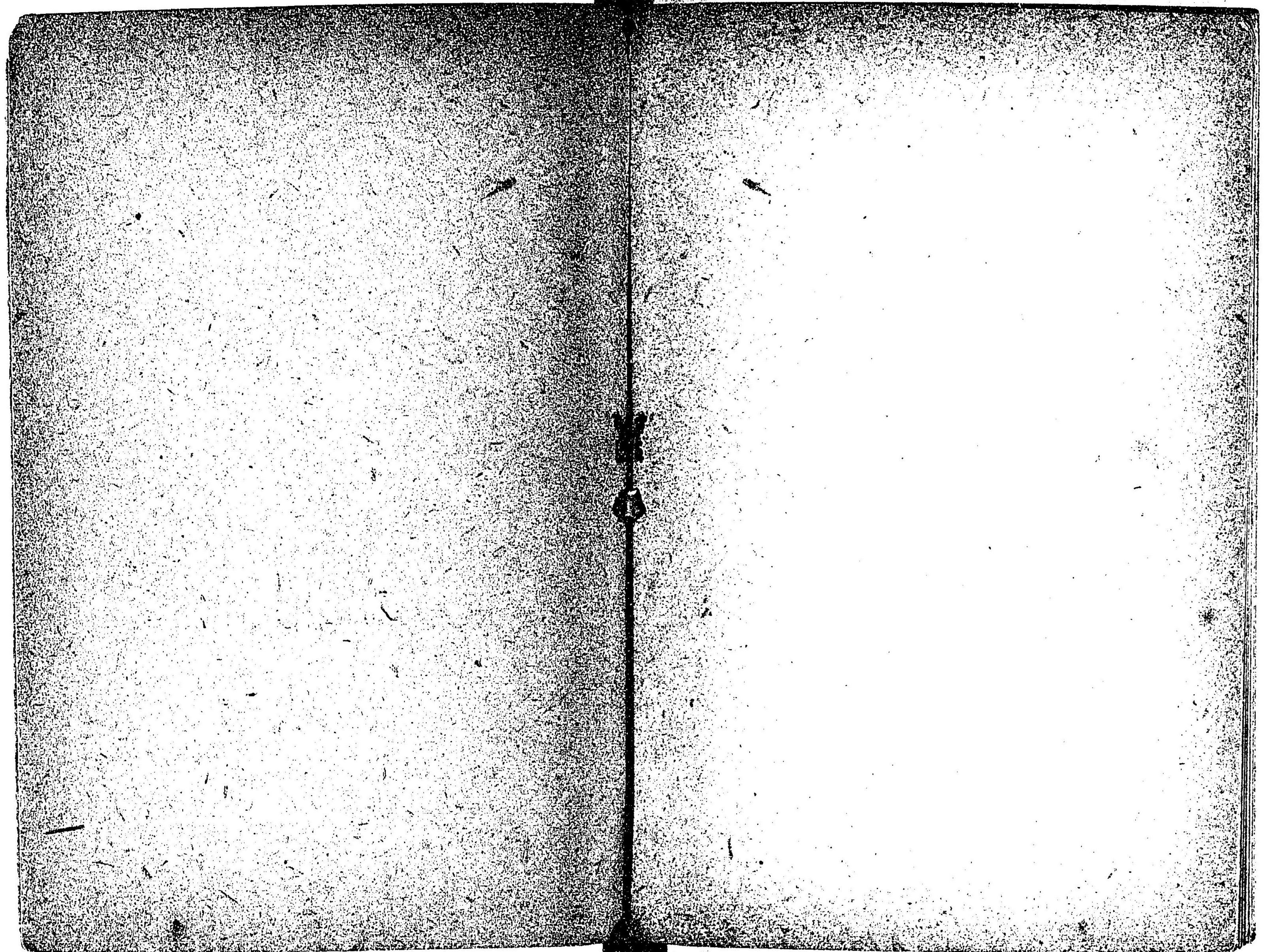
「吉野の山に咲く花も 須摩の浦邊に澄む月も 松をふ島にふる雪も 大和しま根の民草の 人の心に比らべては はへも匂ひも床しさも 及びはせじとさくもの

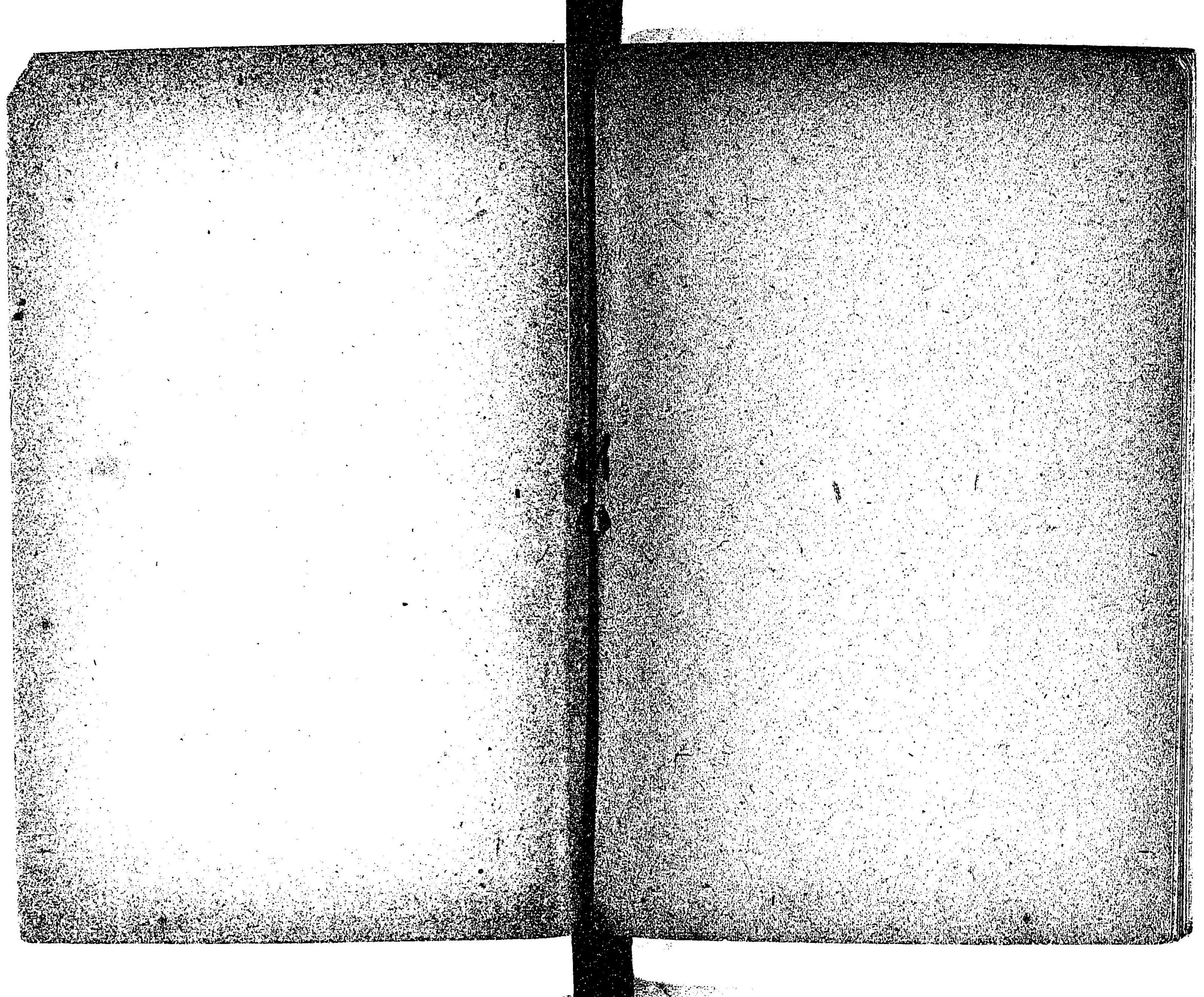
を 何を今の世の人々の 胸の遊りの濁るらん さやけき鏡もくもりはて もの にわづるふ悲しさを 何れの空にぞ告げやすら」

八

「人生纔に五十年 あの世界の旅は何ほどぞ 定め短かき此の世さへ 塵埃に埋もるゝを 永きあの世の如何ならん あの世の後、如何ならん ア、たのみな人の身や 假寝に似たる世の人や 影さへ寒さ己のが身を 互にそれと愛しみ 互にそれと睦まじみ 天つみ空の大神の 尽ぬ恵みの庄屋敷 拜みまつれよ世々の人々」

天の光 (終り)





明治三十二年九月二十五日印刷
明治三十二年十月五日發行

正價金拾二錢

著者

山中重太郎

滋賀縣蒲生郡山中村二十一番地

發行者

木下松太郎

奈良縣山邊郡丹波市町字三島五番地

印刷者

岩井龜次郎

大阪市南區鯉谷西之町十七番屋敷

標 竊 翻 譯 複 製 嚴 禁

發賣元

大和國山邊郡丹波市町
字三島天埋教門前

木下書店

明治三十二年九月新刊發賣廣告

文學士 山中重太郎君著

御かぐら歌解辨

全一冊

本書は著者が世界の多くの宗教の元理を窮めたる力量を以て平民的に妙論高義を述べられたのをありとせず解辨の何人にも分り易く作つたものでありませ

文學士 山中重太郎君著

天理の光

全一冊

本書は著者が二十余年の學問と信仰との結果により讀つて著述したものでありませす大は天地より小は人の日常の言行に至るまで能く道理によりて妙説したものでありす特

明治三十二年九月二十五日印刷
明治三十二年十月五日發行

正價金拾二錢

標榜 翻譯 複製 嚴禁

著作者 山中重太郎

滋賀縣蒲生郡山中村二十一番地

發行者 木下松太郎

奈良縣山邊郡丹波市町字三島五番地

印刷者 岩井龜次郎

大阪市南區巖谷西之町十七番屋敷

發賣元

大和國山邊郡丹波市町
字三島天埋教門前

木下書店

明治三十二年九月新刊發賣廣告

文學士 山中重太郎君著

御かぐら歌解辨

全一冊

本書は著者が世界の多くの宗教の元理を窮めたる力量を以て平民的に妙論高義を述べられたのであります解辨の何人にも分り易く作つたものであります

文學士 山中重太郎君著

天理の光

全一冊

本書は著者が二十余年の苦學と信仰との結果により奮つて著述したものであります大は天地より小は人の日常の言行に至るまで能く道理によりて妙説したものであります時代に後れず此理を極めたいと思ふ人の良友であります

天理教を信仰なさる御方々は左の廣告を是非御覽被下度

一 我國は神國たりしが万國に比類なき世界に秀でたる神國なり而して其神は彼の外國人の云ふが如き想像を以て書き出したるものにあらず開闢の初めより我が日の本を治め給ひし御神ならん此國に生れたらん人々は神を尊敬せではすむべきや然りと雖も何故に神は尊ぶべき何故に敬すべきかを知らざれば尊敬の心は起らぬものなり各天理教の書籍は皆な丁寧懇切に神道を説き神の敬すべき尊ぶべきことを或は説教風に或は講談体に或は演説振りに述べられたるものなれど神職家之を繕けを以て布教の資けとなすべく尊神家之を讀めをますく神の尊敬すべき所以を知り神道に意なきものも一度天理教の御話を聞き又一度左の廣告に記載したる各天理教書を讀むときは忽敬神の人となりこれ迄神とあろろかにせしを悔ゆるにいたらん誠にいまだ嘗てあらざるの珍書なり殊に各本書は活字を大にしたれば老人も容易に讀むを得べく漢字はかならず假名を附しあれば婦女幼童亦讀めざるの憂なし江湖の諸君必各書一冊を購ふて其眞偽を知り玉はんことを願ふ

- 教導職 必携 神道布教規範 定價金拾貳錢今般特別正價金七錢 郵稅金四錢
- 神職 必携 布教道話 定價金貳拾五錢の所今般特別正價拾八錢郵稅六錢
- 文學博士 黑川真頼大人序 古事記講義 全三冊 定價金拾貳錢今般特別正價金七拾錢
- 贈正四位神道大家平田篤胤大人題字 樞密顧問官子爵海江田信義公題 祝詞式講義 全二冊 定價金拾五錢今般特別正價金七拾五錢
- 文學博士 小中村清矩大人序 織原抄講義 全二冊 定價金拾五錢今般特別正價金七拾五錢
- 故大勳位久邇宮朝彥親王殿下御題 古語拾遺講義 全一冊 定價金拾五錢今般特別正價金七拾五錢
- 神道演說集 全一冊 定價金拾五錢今般特別正價金七拾五錢
- 敬神說教道の話 初篇至一冊 定價金貳拾五錢特別實價金拾貳錢 郵稅四錢
- 敬神同 後篇全二冊 定價金貳拾五錢特別實價金拾貳錢 郵稅四錢
- 誠敬神道の話 全一冊 定價金拾五錢特別實價金七錢 郵稅四錢
- 尊神家 必携 大教宣布招書義解 勅語全一冊 定價金拾錢特別正價金七錢 郵稅四錢
- 尊神家 必携 神道明教道話 全一冊 定價金拾錢特別正價金六錢 郵稅四錢

● 神道 說教大意 全一冊 定價金拾五錢 ○ 特別實價金八錢 郵稅四錢
 ● 神道 三條教大憲義解 全一冊 定價金拾錢 ○ 特別正價金六錢 郵稅四錢
 ● 神道 天理教大意 全一冊 定價金五錢 特別正價金四錢 郵稅貳錢
 ● 神道 天理教導軌範 全一冊 定價金拾貳錢 特別正價金七錢 郵稅四錢
 ● 神道 天理教の話 全一冊 今般特別實價金三錢 郵稅貳錢

明治卅年 新出版廣告

● 神道演說集全一冊 特別安價四錢 郵稅二錢
 ● 神道演說全一冊 特別安價八錢 郵稅二錢
 ● 天理伊呂波歌全一冊 特別安價四錢 郵稅二錢
 ● 天理教開祖傳記全一冊 特別安價三錢 郵稅二錢
 ● 天理教開祖傳記全一冊 五厘郵稅二錢
 ● 教祖のをしゑ全一冊 全二二錢
 ● 天理教與佛教 全一冊 正價 郵稅二六錢 特別安價 郵稅四六錢
 ● 各天理教會所在地名細簿 特別安價 郵稅四六錢
 ● 神道本部祭式の圖 郵稅四六錢
 ● 天理本部神樂の圖 郵稅四六錢
 ● 神道教祖墓地圖 郵稅四六錢

明治三十二年 新版

● 天理救助話參考書 代價 郵稅 二六錢 一 定價 郵稅 二七錢

● 神國大道しるべ 代價 郵稅 二七錢 一 定價 郵稅 二七錢

其他書籍色々精々安價に販賣仕候に付各國諸君様左之廣店御覽の上御注文あらんとを願ふ 大和國丹波市町字三島天理教會本部前

書肆賣捌 木下書店

